

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：13401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24593192

研究課題名(和文) 看護診断過程の包括的教育と看護診断の正確性のアウトカム検証

研究課題名(英文) Outcome verification of the accuracy of the comprehensive education of nursing diagnosis process

研究代表者

長谷川 智子 (HASEGAWA, TOMOKO)

福井大学・医学部・教授

研究者番号：60303369

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：看護診断とは、患者の状態を的確に表現し、患者にとって何が今必要なかを伝えるための共通の言語である。そのため、看護師の看護診断能力を高める教育は非常に重要である。本研究では、看護診断能力を高めるための教育介入について評価し、今後の看護診断教育の示唆を得ることと目的とした。本研究では、ケース・カンファレンスを活用した能動的教育介入がより効果的であることが明らかとなった。また、Partnership Nursing System: PNSによる看護業務体制も看護過程の展開に影響していることが明らかとなった。加えて、周手術期では、個別性と心理・社会的問題に対する教育介入が必要であることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：A nursing diagnosis, which provides the basis for nursing interventions, is a nurses' clinical judgement about patients and related people. A purpose of this research was to evaluate nursing diagnosis education interventions. The case conference activities helped nurses to understand patients' situations; thus the conferences could contribute to improve accuracy of nursing diagnoses. The PNS could facilitate nurses' competency on accomplishment of nursing process as well as reduce their burden of making documentations. Most of the stated nursing diagnoses by perioperative nurses were potential risks for physiological problems related to surgical and aesthetical stresses. Nursing diagnosis education interventions are needed for perioperative nurses to focus on more psychological and social nursing diagnoses.

研究分野：医歯薬学

キーワード：看護教育 看護診断 看護過程 診断能力

## 1. 研究開始当初の背景

看護診断とは、患者の状態を的確に表現し、患者にとって何が今必要なかを伝えるための共通の言語であるため、その診断が正確でないと、患者が抱える問題が何であるか他の看護師を始めとする医療ケアチームに円滑に伝えることができない。加えて、看護診断は患者にとって必要なケアを導き出す根拠となるため、正しく看護診断されなければ患者に適切な処置が施されず、最悪な場合生命を危険な状態にさらすことになる可能性もある。そのため、看護師は各患者に対し確実に正確な看護診断を行う責任がある。しかし、看護診断は看護師の業務規定には明記されておらず(日本看護協会、2007)、看護師の看護診断における正確性と看護診断からもたらされるアウトカム(成果)評価は明確とされていない現状にある。

一方、医療における情報管理の必要性から、看護情報も電子化が進み、多くの医療施設で看護上の問題点を表記するためのツールとして看護診断が用いられるようになってきた。加えて、厚生労働省(2004)は、患者が質の高い正確な情報を取得できる環境の整備と、それによる質の高い効率的な医療の提供を促進する目的で、医療分野の情報化を推進してきた。そのような背景の中、日本においては即電子化可能な標準看護用語体系は存在しないため(上鶴、2001)、電子化を試みる施設では独自に看護用語集を作成するか、海外ですでに開発されている標準看護用語体系を利用するしかないのが現状である。膨大な情報の一括管理と迅速な情報伝達を可能にできる電子看護記録も、そのシステムを使用する看護師がその用語を理解し、活用する方法を十分理解できていなければ、電子化の恩恵を受けることはできないと言えよう。また、看護診断は的確な看護介入を導き出す根拠となるため、看護診断を導入することにより適切な看護介入が導き出され、患者にとって望まれる成果ももたらされなければならない。このことから、個々の看護師が正確に看護診断を行うことで、的確な看護介入を導き出し、患者にとって有効な成果が上がる看護ケアを実施できる能力を育成することは非常に重要なことである。

研究者らはこれまで、看護診断能力育成のための包括的教育プログラを構築し、その効果の検証を行ってきた。その一環である心理・社会的問題を抱える患者の事例を元に作成した模擬事例による調査では、看護師・看護学生とも、抽出された看護診断にばらつきが多く、判断に統一性がないことが明らかとなった。

## 2. 研究の目的

### (1) ケース・カンファレンスの教育効果

看護診断の正確性と共通理解を深めるた

めの教育介入であるケース・カンファレンスの効果を明らかにする。

### (2) 模擬事例による教育介入の効果

講義形式の教育介入の模擬事例を使用した効果の検証を行う。

### (3) 看護業務体制と看護診断および看護過程の展開との関連

新しい看護業務体制である Partnership Nursing System: PNS におけるパートナーシップ・マインドと看護過程遂行状況および看護過程展開に対する意識との関連を明らかにする。

### (4) 看護専門領域における看護診断の特徴

周手術期における看護の役割が拡大されている中、周手術期における看護診断の特徴を明らかにする。

## 3. 研究の方法

### 1) ケース・カンファレンスの教育効果

福井大学および関連施設では、看護診断の共通理解を深める目的と、判断の難しい事例に対する看護診断の正確性について議論する目的で、看護診断教育の一環として定期的にケース・カンファレンスを行っている。本研究の対象者はケース・カンファレンスに参加した 50 名のうち、研究協力への同意と調査票に回答の得られた 46 名とした。

調査内容は属性に加え、看護診断に対する自信の程度と、教育介入としてのケース・カンファレンスに対する評価とした。

### (2) 模擬事例による教育介入の効果

教育介入として講義を行った対象者 36 名に対し、模擬事例を使用し看護診断の態度の変化を自記式質問紙票を用いて調査した。調査内容は、属性、看護診断に対する態度、看護診断の知識とした。

### (3) 看護業務体制と看護診断および看護過程の展開との関連

PNS を導入している施設で勤務する看護師 210 名を対象に無記名自記式質問紙票を用いて調査した。調査内容は、属性に加えパートナーシップ・マインド、看護過程遂行状況、および看護過程展開に対する意識とした。

### (4) 看護専門領域における看護診断の特徴

手術看護認定看護師教育課程の研修生 22 名がハイリスク患者に対して実際に行った看護の記録 32 事例を分析対象とした。看護記録より NANDA-I の 13 領域に沿って、術前・術中・術後の看護診断名を算出した。

## 4. 研究成果

### (1) ケース・カンファレンスの教育効果

対象者 46 名の平均臨床経験年数は  $16 \pm 11$  年で、半数近くが看護基礎教育において看護診断の教育を受けていなかった。看護診断に対する自信は、半数以上が全くないか、少しだけあると回答していた。それに対し、ケース・カンファレンスの教育的効果は半数以上がとてもある、あるいは非常にあると回答していた。特に、看護記録や、患者・家族の理解、看護過程の展開、看護介入の方向性決定に役に立っていたと回答していた。また、患者が生きる力となるような計画の立案や、事例を検討し意見を交換することは、自分自身の看護の振り返りに繋がっていたと回答していた。

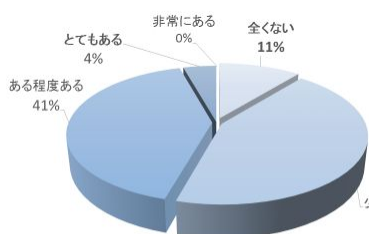


Fig. 1 看護診断に対する自信の程度 n=46

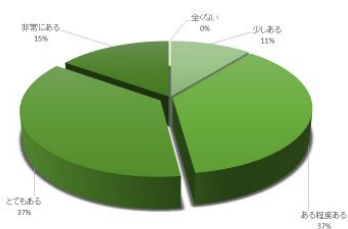


Fig. 2 ケース・カンファレンスの教育効果 n=46

本結果より、教育介入の一環としてのケース・カンファレンスは、看護診断を共通理解し、より正確な診断につなげることに効果があったとともに、患者のよりよい生活のための計画立案や看護介入に繋がっていたことが明らかとなった。これらのことより、ケース・カンファレンスは看護の質の向上に大きく貢献する教育介入であることが示唆された。

## (2) 模擬事例による教育介入の効果

対象者 36 名の平均臨床経験年数は  $13 \pm 5$  年で、看護診断使用経験は  $8 \text{年} \pm 5 \text{年}$  であった。看護診断についての講義受講経験は半数以上があったが、その他の教育を受けた経験は非常に少なかった。看護診断に対する態度について教育介入の前後で比較したところ、「意味がある」「楽しい」「価値がある」などほとんどの項目で否定的態度から肯定的態度に変化していた。しかし、看護診断の定義や診断指標に関する質問への正解率はあまり変化が見られなかった。

本結果より、看護診断の教育は講義などの能動的教育は態度などを変化させることはできるが、看護診断の正確性や知識を高めるには限界があることが示唆された。

## (3) 看護業務体制と看護診断および看護過程の展開との関連

対象者 210 名中 96 名 (50%) を分析対象とした。看護師が苦手意識を感じていた看護記録が PNS 導入で苦手意識が軽減していた。また、看護過程展開に関する苦手意識と PNS 経験期間に負の相関が見られた。また、パートナーシップ・マインドと看護過程遂行状況に弱い正の相関が見られた。このことより、PSN におけるパートナーシップ・マインドの成熟により、看護過程遂行の向上と看護過程展開が楽になったと感じる精神的負担感の変化が期待でき、安全で質の高い看護の提供にも貢献できることが示唆された。

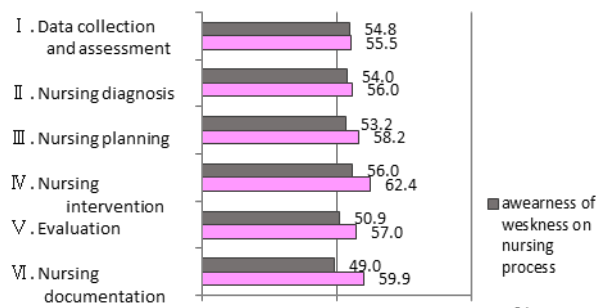


Fig. 3. Implementations of PNS to the nursing process

## (4) 看護専門領域における看護診断の特徴

分析対象となった記録の患者背景は、平均年齢 67 歳であり、疾患は心・血管系 4 事例 (13%)、整形関節系 2 事例 (6%)、整形脊椎系 5 事例 (16%)、肺疾患系 2 事例 (6%)、消化器系 10 事例 (31%)、泌尿器系 8 事例 (25%)、婦人科系 1 事例 (3%) であった。

術前・術中・術後では、「周術期体位性身体損傷リスク状態」「体温平衡異常リスク状態」が上位に挙がっていた。特に術中では、「周術期体位性身体損傷リスク状態」が、32 事例中 31 事例に挙げられていた。また、術前・術中・術後ともに共通していた看護診断名は、「周術期体位性身体損傷リスク状態」「体温平衡異常リスク状態」「感染リスク状態」「非効果的末梢循環リスク状態」「心臓組織循環減少リスク状態」「健康管理促進準備段階」であった。領域ごとでは、術前・術中・術後と関係なく、領域 11 安全/防衛 が最も多かった。次いで領域 4 活動/運動 であった。術後では、領域 12 安楽が上位にあげられた。

周手術期の看護診断の特徴として、術式や術中体位に関連した身体的問題およびリスク問題が主要な看護診断となっていたが、患者の個別性をとらえた診断や精神的診断は

注目されていない現状があった。周手術期の患者・家族の心理・社会的要因に対するケアは看護の重要な役割であるため、周手術期に関わる看護師に対し、今後は心理・社会的要因に関する看護診断が行えるような教育が必要であることが示唆された。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

##### [雑誌論文](計4件)

長谷川智子、看護診断の教え方、院内研修をより効果的に進めるためのコツとポイント第1回、看護さろくと看護課程、査読無、23巻1号、2013、54-57.

上原佳子、看護診断の教え方、院内研修をより効果的に進めるためのコツとポイント第2回、看護さろくと看護課程、査読無、23巻2号、2013、99-102.

長谷川智子、看護診断の教え方、院内研修をより効果的に進めるためのコツとポイント第3回、看護さろくと看護課程、査読無、23巻3号、2013、95-98.

長谷川智子、看護診断の教え方、院内研修をより効果的に進めるためのコツとポイント第4回、看護さろくと看護課程、査読無、23巻4号、2013、16-19.

##### [学会発表](計8件)

Chisato Aoike, Tomoko Hasegawa, Kumiko Asakawa, Yoshiko Uehara, Kanae Kitano, Rika Tonami, Yoshimi Demura, Kumiko Miyagawa, Characteristics of perioperative nursing diagnoses for high-risk surgical patients, NANDA International Conference 2016, May 18-21, Cancun, Mexico.

Tomoko Hasegawa, Yoshimi Demura, Yoshiko Uehara, Kanae Kitano, Rika Tonami, et. al., Imprecations of nursing process and partnership mind in the Partnership Nursing System: PNS, NANDA International Conference 2016, May 18-21, Cancun, Mexico.

長谷川智子、看護過程の展開と看護の可視化、第8回鳥取県実践が活きる看護診断研究会、招待講演、2015年11月28日、鳥取市。

長谷川智子、的確なアセスメントから生み出される正しい看護診断、第21回日本看護診断学会学術大会、2015年7月18-19日、福井市。

出村佳美、長谷川智子、上原佳子、北野華奈恵、礪波利圭、PSNにおけるパートナーシップ・マインドと看護過程展開との関連、第21回日本看護診断学会学術大会、2015年7月18-19日、福井市。

長谷川智子、看護診断の研究：看護診断の正確性の研究、第20回日本看護診断学会学術大会、招聘講演、2014年7月13-14日、神戸市。

Tomoko Hasegawa, Mitsue Hayakawa, Yukari Shimizu, Case Conference to Improve Accuracy of Nursing Diagnosis, ACENDIO 2013, March 22-23, Dublin, Ireland.

長谷川智子、看護診断の正確性を高めるための看護診断教育、第18回日本看護診断学会学術大会、2012年7月14-15日、京都市。

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

長谷川 智子 (HASEGAWA TOMOKO)

福井大学・医学部・教授

研究者番号：60303369

##### (2) 研究分担者

上原 佳子 (UEHARA YOSHIKO)

福井大学・医学部・准教授

研究者番号：50297404

佐々木 百恵 (SASAKI MOMOE)

福井大学・医学部・助教

研究者番号：00422668

(平成24-25年)

北野 華奈恵 (KITANO KANAE)

福井大学・医学部・助教

研究者番号：60509298

礪波 利圭 (TONAMI RIKA)

福井大学・医学部・助教

研究者番号：10554545

出村 佳美 (DEMURA YOSHIMI)

福井大学・医学部・助教

研究者番号：30446166

(平成26-27年)